

2022 年度 川村文化芸術振興財団ソーシャリー・エンゲイジド・アート
審査員 選考所感

工藤安代 (NPO 法人 ART&SOCIETY 研究センター代表理事)



今年度も若手から中堅作家まで意欲的な申請が数多く集まった。表現形式も多様性が増し、国内においても社会性を志向するアーティストが多く誕生している実感を持った。申請プロポーザルの今後の展開に大いに期待したい。なかでもチリ出身の愛知県在アーティストであるエルゲダ・ウォード・スタジオ (ヒメナ エルゲダ) は、これまで世界各国を訪れ、イスという“装置”を通して人々から「故郷」の物語を集めてきた。大分県姫島を実施地とする今回の《ISLAND ATLAS: 私達の言葉は故郷の未来》プロジェクトは、故郷の未来像を島の人びとと描いていくものだ。エルゲダは「孤島」や「閉じられた非流動的コミュニティ」に関心を寄せ、そこに生きる人々をアートの観点から主観的に見つめ、政治的に語られる画一化した「個人」や「生活」ではなく、「確かな実体」として描くことを試みるという。こうした個人の生を具に捉え、そこから社会に横たわる共有的な課題を洗い出す行為は、SEA の歴史において典型的といえるアプローチであり、このプロジェクトの行方を見守りたい。

近藤健一 (森美術館シニア・キュレーター)



Photo: Mikuriya Shinichiro

コロナ禍が長引く現在、本助成でもコロナ禍における SEA プロジェクトをテーマとしたが、コロナ禍を意識した文脈や手法を用いられつつも、移民や移住、ハラスメント、女性、環境問題、障がい、過疎化などさまざまな主題のプロジェクトの応募があったのは、コロナ禍でこれらの諸問題が顕在化していることを意味するのではないかと思った。その中で、前橋市を舞台にコロナ禍で厳しい現実に直面する移民の現状をアーティスト柴田祐輔氏のプロジェクトとして可視化する石井隆行氏の「見えない人たちのまち」と、広島県からハワイへの移住者が多かった史実に着目し、ハワイの日系人コミュニティと今日の広島を接続する原田裕規氏の「ホワイト・アロハ (仮)」は、過去の活動実績や今回の応募プロジェクトの実現性の高さも含め、審査員から高評価を得たと言っていると思う。

なお、できるだけ多くのプロジェクトへの助成を行うことにしたため、企画として優れていても巨額の助成金申請をし、本助成で採択されない場合は実現が不可能に思えるプロジェクトは採択を見送った。また、海外からの応募は優れた企画が少なかったのは残念だった。

清水知子（筑波大学人文社会系准教授）



新型コロナウイルスの感染拡大は、既存の社会の脆弱性を浮き彫りにした。「不安定性」はつねに不平等なかたちで再配分され、危機のシワ寄せはつねに弱者にやってくる。BLM、タイの民主化運動、「女性に対する暴力撤廃の国際デー」に展開されたチリのフェミニスト・アクティヴィズム。コロナ禍にもかかわらず、いやだからこそ、世界の都市の広場には身体の統治をめぐる、インターセ

クショナルなボトムアップ型の政治運動が出現し重要な役割を果たした。

今回採択された企画は、パンデミックを経て改めて実現をめざすべき社会のあり方とは何かを問うものが多かったように思う。なかでも、岩間香純の「闘う糸の会」は、欧米の主流派フェミニズムとは一線を画す、グローバル・サウスの南米フェミニスト・アート／アクティヴィズムと日本を接続し、「コレクティヴ性」を重視したトランスナショナルなフェミニズム実践を試みる意欲的なものだ。またすでに「表現の現場ハラスメント白書」をはじめ、日本の表現の現場における不均衡なジェンダーバランスの現状を可視化し、批判的に検討してきた表現の現場調査団の「ハラスメント量的調査」には、芸術活動そのものの現場から／現場を通して社会を変革する一つのムーブメントとして新たな可能性が開かれていくことを心から期待している。

相馬千秋（NPO 法人 芸術公社代表理事、アートプロデューサー）



Photo: Yurika Kawano

長期化するコロナ禍の影響で海外からの応募件数の減少が顕著な一方、国内から実現方法を探る地に足のついた提案が多く寄せられた。いわゆる現代美術の作品創作に「社会に関与する」プロセスが内包されることは決して珍しくない。さまざまな社会課題を抱えた人や地域にアプローチし、インタビューの言葉や映像を取り入れる作品やプロジェクトが複数寄せられる中、それが最終的に「作家の作品」

に回収されしまう構造に対して、作家自身をもっと批評的に捉えるべきではないか。審査会ではそのような論点で活発な議論が行われた。

そうした議論の中、片山真理の「ハイヒール・プロジェクト」は、作家が向き合い続ける身体や装いの問いを、海外の靴メーカーをパートナーとして開発する意欲的なものであり、また予算の半分をクラウドファンディングによって集める計画など、社会的インパクトをもたらすプロジェクト設計が高く評価された。

藤井光（アーティスト）



カタカナで訳された「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」には、グローバルなものをローカル化するという課題が含蓄されていないだろうか。それはローカルなものをグローバル化するというこの時代に誰もが抱きそうな夢の話とは違う。安全保障、経済、人権といった国際的なネットワークによって形成されるグローバルなものを、ローカルなネットワークから位置づけ直す試みに私は注目した。

現在フランスで活動をする Yuni Hong Charpe は、国境を超えて移動する個人が、そのアイデンティティーを分裂・多層化させていくことに着目する。ナショナリズムと差別の暴力が統合する今日、在日外国人コミュニティと共に歴史を再演する試みは、多元化する社会をどう組み直していくのだろうか期待したい。武谷大介は、私たちの暮らしを支える「現代の奴隷制」として国際的に批判される技能実習制度へとまなざしを向ける。宮城県石巻市で暮らし働く実習生らに在日外国人と地域のマイノリティコミュニティをアート介して結ぼうとしている。新たなネットワークの形成それ自体を終着点とせずに、アートの造形性を通して美学体制を問い直せるのかが試されている。